日本とフランスにおける柔道環境の実態調査

―柔道人口減少への対策―

竹本　舜（大阪教育大学）

1. 目的

本研究では,柔道人口の拡大と競技力の向上に成功している事例としてフランスを取り上げ, 柔道の価値観や環境における実態に関わる現状を把握することを目的とした. 日本とフランスの柔道を行っている者を対象に,実態や価値観を調査し,両国の差異を明らかにすることによって,我が国における柔道人口の減少を食い止めることにつながる資料とする.

2. 方法

1) 対象者：全日本柔道連盟に所属し,現在日本で柔道を行っている者 139 名,平均年齢 20 歳. フランス柔道連盟に所属し現在フランスで柔道の練習を行っている者 103 名,平均年齢 31 歳とした.
2) 調査方法：Google Form を用いて,Web アンケートで集計を行った. アンケートは岡田 (2000) の意識調査に用いられた項目を参考に,作成した.
3) 調査期間：2023 年 11 月 16 日から 12 月 2 日とした.
4) 分析方法：統計解析には,IBM SPSS statistics version24 を用い,各項目において χ^2 検定を行った. 有意な差が認められた場合,残差分析を行った. なお,有意水準は 5%未満とした.

3. 結果と考察

１週間の平均稽古日数と１回の平均稽古時間について調査した結果,有意な関連がみられ, 日本が日数･時間どちらも多く,フランスが短いという事が分かった. 星野ら (2022) によると,フランス人柔道練習者はレクリエーションとして柔道をとらえている傾向があり,練習時間は短くなっていると報告している.日本人柔道練習者は比較的練習の時間が長く,満足度に対しても不満を感じているものが多く,対照的であった. フランスでは複数種目のスポーツクラブの 1 種目として柔道が行われているので,さらに他の種目をする機会も多くなることが考えられる.

山崎ら (1984) の研究でも,フランスの柔道練習者は柔道の身体的なものだけでなく精神的,東洋的,またレクリエーションとしての要素に比較的多くの関心を示したと報告している. これらは,いわゆる「飽き」により柔道から離れていく者を軽減する役目を果たすと考えられる. さらに,フランスでは,学校の中ではなく,地域社会のスポーツクラブが中心となるため,教育制度に関係なく,低年齢から柔道を始めることができる.

柔道を始めた動機において,日本人は「知人の勧め」という項目が多いのに対し,フランス人は自発的な動機の項目で柔道を始めたとの回答が多かった. フランスでは柔道連盟職員が国家公務員で,クラブの運営母体が市町村であることから, 財政面が確立され,宣伝普及活動が盛んにおこなわれている.大滝ら (1986)が述べているように,有名選手の話や試合を観ることから,自ら興味を持って柔道を始めることにつながる.

これらのような調査結果が要因となり,フランスでは柔道人口の増加につながっていると考えられる.

4. 結論

日本の柔道人口減少の原因について検討する為に,柔道人口の拡大と国際大会での成績が向上しているフランスを取り上げ,日本とフランスの柔道家の実態や意識を調査し,両国の差異を検討した結果,フランスにおいて柔道人口が増加し,国民的スポーツになったことが分かった.フランスの場合,保護者がしつけや規律,教育を求めたので,フランス柔道連盟はそれに応え,教育としての柔道の指導法を開発,統一,改善してきた.

一方,日本の場合は,学校で柔道をするので,保護者のニーズに直接答える必要はなく,大会が増え,オリンピックのための強化が加速し,努力主義･根性論が蔓延した結果,その弊害として体罰やしごきも広がっていったと考えられる. フランスの柔道人口増加の要因をそのまま,国民性,教育制度,文化が異なる日本に当てはめることは難しいとは考えられるが,運営組織や個々の指導者が学ぶべき点は多くあると考えられる。

＜参考文献＞

1) 井浦吉彦,湊谷弘(1991)「ヨーロッパの柔道クラブにおける修行者の実態について」武道学研究,24 (2):193-194.
2) 岡田弘隆,青柳領,中村勇,南條充寿,林弘典. (2000). フランスと日本の青少年柔道練習者の実態と意識調査. 武道学研究, 33(1), 31-39